REVIEW ESSAY

松本康, 2021,『「シカゴ学派」の社会学——都市研究と社会理論』有斐閣.
宝月誠, 2021,『シカゴ学派社会学の可能性——社会的世界論の視点と方法』東信堂.

シカゴ学派はいかに理解可能か
——都市研究と社会的世界論の展望——

関　駿平・大和　冬樹・宮地　俊介

1　はじめに

シカゴ学派の社会学は都市社会学や社会病理学の古典として重視されてきた。特に現代日本におけるその受容は、それを異なる形で発展させてきた 2 人の論者に大きな影響を受けている。

その一人は宝月誠である。シカゴ学派の学説研究に取り組みつつ、自身も逸脱ビジネスの事例研究に着手してきた。もう一人は松本康である。シカゴ学派の丹念な邦訳に取り組みながら、ネオシカゴ学派のクロード.S. フィッシャーを受け継ぎ、日本にパーソナルネットワーク分析の土台を築き上げてきた。

このように学説史・実証研究の双方から日本のシカゴ学派社会学を牽引してきた 2 人の碩学が、このたび偶然にも同時期に単著を出版した。宝月誠『シカゴ学派社会学の可能性——社会的世界論の視点と方法』と松本康『「シカゴ学派」の社会学——都市研究と社会理論』である。しかし、シカゴ学派については既に数多くの学説研究があるなかで、なぜ両著作がいま世に問われる必要があり、私たちはこれらの 2 冊をどのように継承すべきなのだろうか。本稿の目的は、両著作の内容を整理し、学説史的に位置づけることで、その現代的な意義をより明確に提示することである。

本稿の構成は次の通りである。初めに第 2 節、3 節では、両書の概要を示しながら、論点の異同を整理する。続く第 4 節、5 節では、実証的研究への応用も見据えつつ、学説史的な整理・理論的な検討を行う。4 節では、主に松本の著作の論点を引き継ぎ、近年の生態学的視点の再評価を認識論的特徴と調査方法の発展から論じる。5 節では、宝月が論じる社会的世界論の現代的な意義を明確化するために、シカゴ学派による社会的世界論の系譜から宝月の貢献を再解釈する。

本稿は、シカゴ学派という同じ対象を扱っているとはいえ関心も主張も異なる 2 つの著作を一挙に論じており、その意味では挑戦的な書評といえるかもしれない。しかし、2 冊を比較することは多様な解釈がありえるシカゴ学派を、なぜ・いかにして継承すべきなのかについて示唆を与えることにもなるだろう。

そもそも、シカゴ学派には膨大な一次資料・二次文献が存在する。特にアメリカでは社会的背景や学内の制度的・人事的要因などをつぶさに再構成していく知識社会学的研究も進んでいるが、日本では資料へのアクセスの難しさや言語・文化の壁から「そうした最先端の研究に遅れずについていくのがやっと（松本 2021: 2）」という状況である。なかでもシカゴ社会学の中核をなすモノグラフ研究は数も膨大であり、未だにその全ては精査されていない（宝月 2021: 149）。そのため、全体を見通すのが難しい「シカゴ学派」が、いかにして理解、継承されうるかは、その紹介者の関心やスタンスに極めて大きく左右されることとなる。

したがって、いま実りある形でシカゴ学派を引き継ぐためには、まずは紹介者である松本・宝月がいかにそれらを受容し、あるいはその違いがなぜ生じているのか整理しておくことが、やはり必要なのである。特に日本では、シカゴ学派を自らの原点とする都市社会学・社会病理学の 2 分野が、それぞれ別個に展開してきた歴史がある（西澤 1996）。本稿は両分野の架橋を試みたりするものでは必ずしもない。けれども、両分野の代表たる松本・宝月による受容や紹介の仕方をトレースすることで、それぞれの問題関心や立場からシカゴ学派の「見え方」がなぜ・どのように異なるのかまできちんと明らかにしたうえで、その現代的な意義を提示するものである。

まずは次節で、両著作の目次に則しつつ、その概略を示しておこう。

2　両著作の要約

2–1　宝月誠『シカゴ学派社会学の可能性――社会的世界論の視点と方法』

宝月は本書が「シカゴ学派と現在の社会学的研究を対比することで、現代の社会理論や方法論を再考する契機にしようとするもの（宝月 2021: iii）」であるとしたうえで、以下のように説明する。

> 本書のスタンスは……シカゴ学派のなかに現代社会学の研究に資すると思われる理論的視点や方法を発掘しようとするものである。確かにシカゴ学派にデュルケームやヴェーバーに匹敵するような体系的な理論を求めることはできないかもしれない。しかしシカゴ学派の一連の都市モノグラフは理論的視点を考えるうえで魅力的な社会学的遺産である。そこにはあたかも交響曲を奏でるように、都市に暮らす人々のさまざまな生活が響き合っている。それらは単に人々の悲哀に満ちた生活の様子や生活の知恵を生き生きと描くだけでなく、その背景に存在し人々の生活に影響を及ぼしている意味世界や制度、あるいは社会的位置などの社会構造の力、すなわちメカニズムについての洞察が含まれている。もちろん曖昧な点も多いが、それらを掘り起し洗練することでひとつの社会学的視点にしようとするのが本書の意図するところである。（宝月 2021: iv）

ここで宝月がシカゴ学派から引き継がれるべきひとつの「可能性」として最重要視するのが「社会的世界論」である。その内容は本稿 5 節で詳述するが、ここでは簡単に経験的世界や出来事を探求する理論的視点と方法論の総体であるとだけ述べておこう。宝月はこの社会的世界論を具体的なモノグラフから引き出して、精錬しようとする。そのため本書全体の構

成は、各モノグラフを詳細に検討したうえで、そこに前提とされる科学観・理論的視点を検討する流れになっている。

はじめに
第一章　「科学」としての社会学を求めて
第二章　人間生態学の視点――パークとバージェスの貢献
第三章　シカゴ・モノグラフの諸相
第四章　コミュニティの社会解体と再組織化――ショウの非行研究を中心に
第五章　ダーティワークの世界――レクレスとサザーランドのモノグラフを手掛かりに
第六章　シカゴ学派のその後の展開――方法論を中心に
第七章　社会的世界論の視点と方法
おわりに

第 1 章では、トマスとズナニエツキが社会学をいかにして「科学」として基礎づけようとしたのかが検討される。著名な『ポーランド農民』については詳しい解説がなされるほか、あまり触れられることのない『不適応少女』（トマス）や『社会学の方法』（ズナニエツキ）も取り上げられる。また、『ポーランド農民』以降トマスは行為の理論化を目指し、ズナニエツキは科学的方法の進化を目指したというように、両者が異なる方向性に進んでいったことも紹介されている。

第 2 章では、シカゴ・モノグラフの柱となったパークとバージェスの人間生態学・同心円モデルが検討される。シカゴ学派とハルハウスやデュボイスとの断絶を批判する先行研究にも応える目的から、それらの異同について検討したうえで、同心円モデルがシカゴ学派に高水準の理論的根拠を提供するものだったことが主張されている。人間生態学については、それが生態学の語彙を用いることでコミュニティ間の関係変容をメカニズムとして語る視座であり、黒人居住地の分離・拡大過程を分析する経験的研究に活用されていたことも紹介されている。

第 3 章では、1920 年代から 30 年代にかけて発表されてきたシカゴ・モノグラフが検討される。スラッシャー『ギャング』、ヒラー『ストライキ』、ゾーボー『ゴールド・コーストとスラム』、E. ヒューズ『シカゴ不動産協会：制度の成長』、クレッシー『タクシーダンス・ホール』、フレイジア『シカゴの黒人家族』、キャバン＆ランク『家族と大恐慌』、H. ヒューズ『ニュースと人の関心をひくストーリー』というように、8 つものモノグラフについて解説がなされ、そのいくつかはシカゴ学派以外の研究と比較検討されている。シカゴ・モノグラフのテーマ・対象は多岐に渡るが、問題状況に直面した集団・個人の適応過程を生き生きと語る点は共通する強みであることが強調されている。

第 4 章では、ショウが発表した一連の非行研究が取り上げられる。この章のポイントはショウが①コミュニティ＝非行地域の観点から社会解体を論じたこと、②統計的研究と事例研究の両方を駆使して調査研究を精力的に行っていたこと、③それと同時に児童福祉事業「シカゴ・エリア・プロジェクト（CAP）」のディレクターも務め、研究を実践に結び付けよ

うとしていたことの 3 点に整理できる。ショウに代表される社会解体研究は、社会構造などのマクロな要因を説明に組み込んだり、人々を逸脱行為に導くメカニズムを可視化したりすることによって、更なる理論的発展が可能であることも示唆されている。

第 5 章の検討対象はダーティワークのモノグラフである。シカゴは移民を多く擁したために、彼らが従事せざるを得なかった「好ましからざる」仕事の世界はシカゴ学派初期からの中心トピックであり、レクレス『シカゴの悪徳』などの優れたモノグラフが残されてきた。ただし、宝月は「ダーティワーク」の射程を、サザーランド『ホワイトカラー犯罪』に見られるような、表面上は「まっとうな」ビジネスの裏で行われる非道徳的振る舞いにまで広げて検討を試みる。そのことによって、一見すると異なる種類のモノグラフにおいても、対象者たちの意味世界を再構成して論じようとする視座がシカゴ学派に継承されてきたことが強調されている。

第 6 章では 60 年代以降の第二次シカゴ学派が方法論の面から検討される。前半ではブルーマーの「自然主義的方法」が、その前提となるプラグマティズムの科学観にまで遡って解説される。後半では、その影響のもとで展開した方法論として分析的帰納法、グラウンデッド・セオリー、ベッカー『社会学の技法』の 3 つが取り上げられ、シカゴ学派以外の方法論（拡大事例法やプラグマティズム的な事例研究）と比較検討される。これらの方法論ごとの違いは、それを決定づける理論的視点の違いに依拠することが示唆され、続く第 7 章ではその一例としての社会的世界論を検討することが予告される。

第 7 章では、理論的視点と方法論の総体としての「社会的世界論」が、経験的なモノグラフ研究から抽出・提示される。社会的世界論は、①対象としての社会的世界、②その背後に想定される社会的存在についての理論的視点、③両領域を媒介する方法論から構成される。①の社会的世界は、ストラウスやクラーク、ショートなどから着想を得て、「さまざまな出来事や経験が次々と生じている具体的な経験世界」（宝月 2021: 394）と定義される。②の理論的視点とは、社会的世界を構成する要素としての意味世界／制度／社会的位置／相互行為、あるいはそれらがいかにして相互に作用するのかを同定する立場を指す。③の方法論では、社会的世界を知るために必要なデータの収集、推論、検証について説明される。これらをうけて、社会的世界論とは、社会的世界が生成されるストーリーを、その構成要素同士のメカニズムの次元から理解し、そこで生活する当人たちにとっても有用な知をフィードバックすることを目指す立場であることが示される。

宝月が本書で一貫して注視していたのは、「科学としての社会学」という論点であった。すなわち、「理論的視点と方法」はシカゴ学派の経験的研究を科学たらしめる本質的な条件として位置付けられている。そのため本書は、科学としての社会学を目指したトマスとズナニエツキ（第 1 章）から始まって、その使命を引き継いで理論を彫琢したパークとバージェス（第 2 章）、その影響下にあったモノグラフ（3-5 章）を精読し、そのうえで改めて方法論・科学観（第 6 章）、理論的視点（第 7 章）を検討し直す構成になっている。

2–2　松本康『「シカゴ学派」の社会学――都市研究と社会理論』

一方、松本は本書の目的を次のように述べている。

本書は、……内外の最先端の研究に学びながらも、時代とともに繰り返し回顧的に再構築される「シカゴ学派」の姿を、構造―機能主義やネオ・マルクス主義など他の理論的パラダイムとの関係において捉え、主たる焦点を都市研究に合わせて中級者向けの教科書としてまとめてみたものである。「シカゴ学派」の言及対象は、一九二〇年代〜一九三〇年代のシカゴ社会学にあるものの、「シカゴ学派」をめぐる物語は、むしろ一九六〇年代以降に紡ぎ出され、都市研究の分野では二一世紀に入っても継続している。なぜ不死鳥は飛び続けているのか。その含意を探ることが本書の目的である。（松本 2021: 3）

松本は、シカゴ社会学の研究群を「学派」として固定的にのみ見なす立場を慎重に退けつつ、他の社会学理論や都市研究との異同や関係性を洗い出していく。それは、「シカゴ学派」がそれとして構築され、正統派「都市社会学」として位置づけられていく過程で後景化した理論的含意の発掘を本書が目指しているためだ。したがってその構成は、戦前のシカゴ社会学を解説したのち、戦後その周囲で発展した社会学理論・都市研究を検討していく形になっている。

序章　「シカゴ学派」の社会学
第１章　都市の発展とシカゴ社会学
第２章　黄金期のシカゴ社会学
第３章　社会学のパラダイム転換――構造―機能主義・計量革命とシカゴ学派
第４章　都市社会学と社会理論 I ――都市地域コミュニティとアーバニズム
第５章　都市社会学と社会理論 II ――ネオ・マルクス主義の台頭
終章　「シカゴ学派」とは何か

第 1 章ではそもそも「シカゴ学派」がいかなる社会的土壌のもとで形成されたのか、シカゴという都市の特徴やシカゴ大学をめぐる制度的事情について説明される。

第 2 章では黄金期を築いた 1920-30 年代のシカゴ学派の理論的・経験的研究が検討される。多様な論点を内在させたパークの『都市』、モノグラフの理論的根拠となったバージェスの「人間生態学」のほか、アンダーソン『ホーボー』、マウラー『家族解体』、スラッシャー『ギャング』、ゾーボー『ゴールド・コーストとスラム』といった具体的なモノグラフが、それぞれいかなる意味でシカゴ学派を代表する功績であるのか説明されていく。複数の因果的説明が絡み合って構成されるワースの「生活様式としてのアーバニズム」については、内容を分解しながら丁寧な解説がなされている。

第 3 章の焦点は社会学のパラダイム転換とシカゴ社会学の再発見である。第 1、2 節で見る通り、1950 年代以降、構造―機能主義の台頭と「計量革命」の展開によって、シカゴ社会学は時代遅れのものとなってしまう。ところが、理論・調査法への不満が高まっていく 1960 年代後半には、シカゴ社会学は両者に対するアンチテーゼとして再発見され、「シカゴ学派」としてシンボル化されていく。第 3 節ではこの一連の過程がシカゴ社会学の内部抗争や「ブルーマー＝ヒューズ・トーク」の応答から再構成される。

第 4 章前半では、シカゴ学派の内部革新を図ってきた地域コミュニティ論が検討される。

初めにその理論的背景としての都市生態学が、セクター理論、多核心理論、文化的生態学、社会地区分析と因子生態学の順に検討され、人間生態学の視座が経済学的な立地理論へと収斂していったことが示される。次に、地域コミュニティの持続と変容を説いて「修正シカゴ学派」の嚆矢となったジャノウィッツ、労働集団のネットワークに注目することで地域コミュニティ観を刷新したコーンブルム、コミュニティのシンボリックな側面に着目することでその階層的秩序を明らかにしたハンターらの業績が検討されていく。

第 4 章後半では、ハーバード構造主義の社会的ネットワーク研究が検討され、ワースの理論で従属変数・独立変数に位置づけられていたコミュニティ・都市の効果について、それぞれ新しい論点がもたらされたことが説明されている。ウェルマンの「コミュニティ解放論」は、コミュニティを紐帯のネットワークとして定義することで、その喪失・存続に代わる新しい在り方としての「解放」を論じた。また、フィッシャーの「下位文化理論」は、都市の効果に照準し、それを多様な下位文化の形成として論じた。両者はシカゴ学派の伝統的視点にハーバード構造主義の分析を組み込むことによって、パーソナル・ネットワークの広がりまで踏まえた形で地域コミュニティ論を発展させた。

第 5 章の検討対象はネオ・マルクス主義の都市研究である。従来の都市社会学を固有対象不在の「都市イデオロギー」であるとして批判したカステルは、ルフェーヴルが提起した空間生産の問題系を消費の問題系へと転換することで都市社会学の対象を規定し、理論偏重であったアルチュセール流のマルクス主義認識から経験的研究への脱皮を図ろうとしていた。また、マルクスが提起した矛盾についての問題を時間・空間という次元から捉え返すことで都市分析の理論を形成したハーヴェイは、ルフェーヴル、パーク両者の都市観を批判的に引き継ぐことで、都市空間の生産・使用に対する民主的統制の権利に「都市への権利」を見出そうとしていた。章の終わりでは、マルクス主義とシカゴ学派に分かれて行われた誌上シンポジウムを検討し、両立場が議論をすれ違わせながら互いにそのアイデンティティを構築していった過程が示されている。

終章では「シカゴ学派」がいかなる意味で「学派」と呼びうるものなのか改めて整理される。そのうえで、シカゴ学派の特徴が (1) 社会改革主義のもとで科学としての社会学を目指したこと、(2) 未熟ながらマルチ・メソッドの調査方法論を実践したこと、(3) 社会過程を空間的文脈において捉える生態学的視点を発展させ、マクロ・レベルの生態学的変数に独自の理論的意味を見出していたことにまとめられる。松本は、こうした利点を明確に意識していたアボットやサンプソンの議論にも示唆を受けながら、シカゴ学派の科学的改革主義のアプローチが、民主主義的な社会統制を考えるうえで現代的にも重要な意義を持っていることに触れ、議論を締めくくる。

松本はかなりのページ数をハーバード構造主義やネオ・マルクス主義の解説に割いている。そのため順当に「シカゴ学派」の教科書・学説史を期待した読者は驚きを覚えるかもしれない。しかし、それは我々が自明視している「シカゴ学派」という輪郭が、特に 1970 年代以降、それとの対比のもとで自らの立ち位置を定位しようとした都市研究によって構築されてきたことを抉剔する戦略であった。改めて本書の構成は、シカゴ社会学の誕生と興隆の様相

（第 1-2 章）、戦後、台頭するハーバード、コロンビアとの関係のなかで凋落し、再発見される様相（第 3 章）、修正シカゴ学派やハーバード構造主義にシカゴ流の生態学が回帰する様相（第 4 章）、ネオ・マルクス主義との対比によってシカゴ学派がスタンダードな「都市社会学」として構築されていく様相（第 5 章）に整理できる。最終章では、ここまでの流れを踏まえて今一度「シカゴ学派」とは何であったのかが検討される（終章）。次節では、ここまで別個に内容を概観してきた両書について、その異同を指摘しながら包括的に整理していこう。

3　2 つの「シカゴ学派」――両書の異同をめぐって

3–1　両者の問題関心について

第一に、シカゴ学派の見失われた理論的含意を発掘しようと目指す点で、両書には共通の問題関心を指摘することができる。宝月は、一般に没理論的と見なされがちなシカゴ学派の研究群に通底する理論的視点を抽出することで、現代の社会学に再考を促そうとする（宝月 2021: ix）。他方で、シカゴ学派が求心力を持ち続ける理由を「学派」構築の歴史を描くことで説明する松本にも同様の関心は指摘できる。戦前のシカゴ学派は都市社会学の古典的地位を与えられているものの、構造－機能主義と計量革命が標準的な概念体系を整備して以降の現代社会学からすれば、そこには提言と調査が密接に結びついた奇妙な科学観、あるいは稚拙な語彙体系ばかりを見出してしまいやすい（松本 2021: 256-7）。松本はシカゴ社会学が 60 年代末から主流の社会学にとってのアンチテーゼとして構築されていく歴史を紐解くことで、このような見え方の相対化を図り、シカゴ社会学が現代もなお参照され続けることの意義付けを、その理論的含意を説得的に示すことによって目指す（松本 2021: 3）。このように整理すれば、松本は宝月の問題提起に対して 1 つの応答を試みていると言えなくもない。

しかし、その際に両者が着目するポイントは大きく異なる。松本はシカゴ学派を他の理論的立場としてのハーバード構造主義やマルクス主義と比較していく（松本 2021: 3）。したがってその理論的な特性は、都市やコミュニティを把握し説明する視点に見出されることとなる。他方で宝月は、社会的世界論を典型例として、人々が具体的な問題状況に適応していく過程を再構成する視点にシカゴ学派の理論的な特徴を見て取っている（宝月 2021: 393）。そのため都市やコミュニティは、重要ではありつつも、あくまでも問題状況を特定するための「社会的位置」の一要素に留まる。

詳しくは本稿 4 節に譲るが、松本が注目を寄せるような都市研究における理論的含意については、近年、サンプソンらも精力的にその再解釈を進めている。そのため都市社会学においては、シカゴ学派の都市・コミュニティ観を現代的な水準から再評価することは、アクチュアルな研究課題となっている。一方で宝月は、サンプソンらの功績をシカゴ学派再解釈の一つの到達点として評価はしつつも、社会的世界論は「場所空間に加えて階級や界、ネットワークなどの視点を社会的位置の概念によって統一的に捉えることを可能」にするものであり、したがって地理的な説明に特化したコミュニティ論を超え出る利得があることを強調している（宝月 2021: 464）。

抽象化すれば、両者の相違は研究対象を把握・説明するうえで「時間」・「空間」のどちら

を重視するかの違いとも整理できるだろう。松本が強調する都市・コミュニティ研究が空間に主眼を置くものであることは言うまでもない。他方で宝月はシカゴ・モノグラフの核心となる社会的世界論を「単なるエスノグラフィー・質的調査ではなくて、時間的経過を重視し、社会的ストーリーの構築を目指すもの（宝月 2021: 465）」と定義している。特にその眼目は、「過程」、「メカニズム」、「ストーリー」など、意味世界を時間的な経過に沿って理解・説明することにあるとされている（宝月 2021: 42-5, 116-8, 415-25, 437-48）。

この相違は、まずは両者のバックボーンの違い（松本―都市社会学・宝月―社会逸脱論）に由来すると考えられる。ただし、それは単に分野間の違いというだけではなく、シカゴ学派の解釈・継承可能性に直接かかわってくるものだろう。すなわち、私たち現代の研究者は、時間・空間の双方に及ぶ問題関心が混合されている粗削りかつ豊潤なシカゴ学派の蓄積からは、各人の関心に極めて限定された形でしか継承すべき論点を選択することができない（この点は Abbott 1999=2011 の第 7 章なども参照）。松本と宝月が時間・空間のどちらにも目配りしていたことは当然の前提であるが、単純化を恐れず言えば、松本はより「空間」に、宝月はより「時間」に照準を絞ることによって、継承すべき理論的含意を無理なく提示しようとしていたとも評価できる。

では、ここまで見てきた差異は、どのようなシカゴ学派観によって導き出されたものであり、また、それは両者による学説史のまとめ方にどのような影響を与えているのだろうか。両者が共通して取り上げているトピック（第 2 節）、どちらかのみが取り上げているトピック（第 3 節）の順に、整理・検討していこう。

3–2　共通するトピックについて

いわゆるシカゴ学派の「黄金期」として知られる研究群は両著作とも取り上げている。すなわち、その基本的な研究方針を打ち立てたトマスとズナニエツキ（宝月 1 章、松本 1 章）、パーク＆バージェス（宝月 2 章、松本 2 章 1 節）、彼らの指導学生が 1920〜1930 年代に生み出した大量のモノグラフ（宝月 3 章、松本 2 章 3 節）は、両著作共通のトピックである。だがその場合も、シカゴ学派をそれを「科学」として担保してきた理論的視点―方法論から捉えていこうとする宝月と、「学派」としての輪郭を問い直すことでその他の都市研究と比較する松本とで、その見え方は異なってくる。

まず、トマス＆ズナニエツキの『ポーランド農民』について、両者のまとめ方の違いを見てみよう。松本は同書について、例えば社会心理学アプローチや社会解体論など、後に「シカゴ学派」的と見なされていく特徴の多くを有していた点を強調する（松本 2021: 20）。一方で宝月は、「『科学』としての社会学を具体的に提示する」トマスらの目的意識をより強調する（宝月 2021: 3 ほか）。そのため宝月は、彼らがモノグラフを書くにあたって用意した方法論ノートの内実にも踏み込み、彼らが目指していた科学の条件――概念枠組みとデータを使用すること、法則定立、検証、社会実践への応用を目指すこと――にも触れている（宝月 2021: 6-8）。これら科学観は現在から見れば目新しいものではないが、プラグマティズム哲学から黄金期・第二次シカゴ学派に至るまで、シカゴ学派の基礎として重要な役割を果たしてきたのであった。

パークとバージェスの取り上げ方も両者で異なる。例えば松本は、都市を動態的な空間構造として示す同心円モデルの説明に紙幅を割き、他方で宝月は経験的世界の生成をストーリーやメカニズムとして語る視点がいかなる科学観に支えられているかについて紙幅を割いている。

宝月の場合、パークたちが科学として社会学を成立させる使命をトマスとズナニエツキらから引き継いでおり、人間生態学の視座や語彙体系（競争・闘争・応化・同化）、あるいはそれに基づいて対象をストーリーとして構成する自然史の方法が、「科学としての社会学」を裏付けるためのものであったことを強調している（宝月 2021: 87-90）。

他方で松本は、むしろパークたちの語彙が現代の科学観や社会学から見た場合、いかに奇妙なものとして映るかについて注目する。松本は、多岐に渡るパークの研究関心のうち最も根底的なものが「都市」にあるとして、その記念碑的論文である「都市――都市環境における人間行動研究のための提案」を検討する。同論文の特徴は、道徳的秩序、道徳地域、社会的感化、気質、モーレスなど、構造―機能主義による社会学の標準化以降、意味をとるのが難しくなってしまった独特な語彙が散りばめられていることにある。松本はその記述内容を解きほぐすことで、道徳的な価値判断を離れて都市そのものの複雑性を理解しようとしていたパークひいては当時のシカゴ学派に特有な科学観を明らかにしていく（松本 2021: 36-40）。

最後にシカゴ・モノグラフの取り上げ方の違いも確認しておこう。例えば松本がよりフォーカスするのは、同心円モデルを用いてシカゴの家族地区を描いたマウラー『家族解体』や、コミュニティ論の重要論点である衰退／存続に触れたワース『ゲットー』である（松本 2021: 53-8, 67-71）。他方で宝月の場合、ストライキの展開過程を自然史によって説明したヒラー『ストライキ：集合行動の研究』を取り上げ、同じくストライキという対象を社会構造から説明したウォーナー『ヤンキー・シティー』と比較することでシカゴ学派独自の理論的視点を際立たせようとしている（宝月 2021: 154-60）。両書で同じモノグラフが取り上げられる場合もその主眼の置き方は異なる。例えばスラッシャー『ギャング』であれば、宝月はギャング形成のメカニズムが当人たちの社会的状況から再構成されている点を強調しているし（宝月 2021: 149-54）、松本は地図上にプロットされたギャング集団に生態学アプローチが適用されている点を評価している（松本 2021: 58-62）。

松本によれば、これらのモノグラフは、都市空間という生態学的な場における社会過程を（パーク＆バージェス）、社会心理学的説明（トマス）によって解釈している。こうした意味でモノグラフにはトマス、パーク、バージェスらの視点が継承されており、それら社会心理学・生態学の語彙を用いて都市の経験的事象を記述してきたことにその理論的特徴がある（松本 2021: 71）。他方で宝月にとって、シカゴ・モノグラフは社会的世界論の源泉である。分析者がモノグラフで対象化される当事者や意味世界の背後にあるメカニズムを明らかにし、それをストーリーとして記述・説明する視点が理論的な特徴であり、シカゴ学派が科学であるための必須の条件でもある。宝月・松本は、膨大なシカゴ学派の経験的研究群を 1 つのまとまりとして見通すために補助線を引き、それに即して引き出しうる理論的特徴をそれぞれの観点から示していると言える。

両書は、これ以降の章ではそれぞれ異なるトピックを取り上げて、議論を組み立てていくことになる。次の節では、どちらかのみが選択したトピックについて、その取り上げ方を検討していこう。

3–3　どちらかのみが取り上げているトピックについて

まずは、両著作が扱ったトピックをおさらいしておこう。宝月は、具体的なモノグラフについて、論点を非行とダーティワークに絞ってよりインテンシブに検討したうえで（第 4-5 章）、今度は抽象度を上げて、それらに通底する方法論（第 6 章）・理論的視点（第 7 章）を検討する構成をとる。松本はシカゴ学派それ自体からは離れ、構造―機能主義と計量革命（第 3 章）、ハーバード構造主義（第 4 章）、ネオ・マルクス主義（第 5 章）を検討していく。シカゴ学派内部の検討をより深めていく宝月と、その外部からシカゴ学派を浮き彫りにしていく松本とで方向性が分かれていくと言えるだろう。

その結果、黄金期を終えたシカゴ学派が、その後、学派の内部・外部によってそれぞれいかにして継承され、あるいは継承され損なったのか、全く異なる学説史が描かれていくこととなる。議論を先取りすれば、宝月はシカゴ学派の次世代が対象の「過程」を記述する方法的立場を黄金期からいかに引き継ぎ、研ぎ澄ましていったのか、その内部の検討をより深めていく。松本は「因果」というキーワードから都市研究・コミュニティ論の展開を整理し、シカゴ学派の歴史的位置をその外部との関係性から浮き彫りにしようとしていく。順を追って検討していこう。

宝月は第 3 章で 8 つのモノグラフを概観したのち、章を改め、よりインテンシブにモノグラフを検討していく。それは 4-5 章でそれぞれ取り上げる非行（第 4 章）、ダーティワーク（第 5 章）のモノグラフが、第 3 章で抽出されたシカゴ学派の強みを特に生かした成果であるためだと考えられる。例えば第 5 章で検討されるレクレス『シカゴの悪徳』では、まずは当時の売春をめぐる位置づけが、新聞・世論、警察や政治組織との関係のもとで示される（宝月 2021: 274-7）。そのうえで、売春宿がこれらの動向に合わせて、時に競合店の少ない地域へ移動するが、時には敢えて競合店の多い地域へ移動して共存繁栄を図るなど、「戦術」を変えつつ「適応」を図っていく様子が描かれている（宝月 2021: 281-2）。すなわちレクレスのモノグラフは、問題状況に相対する当人たちがダーティワークを生成させていく過程を生き生きと写し出しており（宝月 2021: 315-8）、シカゴ学派の持ち味を象徴する成果といえるものであった。

これに続く第 6 章の議論の内容は、時代も抽象度もそれまでの章から 1 つずつずれたものになっている。つまり、この章では黄金期に続く第二次シカゴ学派が、先行する世代の具体的なモノグラフからどのように方法論を取り出し、洗練させてきたのかが主題となっている（宝月 2021: 325-8）。

特に、ベッカー『社会学の技法』を「シカゴスタイルの方法を総括」（宝月 2021: 327）したマニフェストとして詳しく検討しているのは宝月の特徴的な点だろう。ベッカーは対象となる出来事について、その背後にある隠れたメカニズムをデータとの対話から明らかにすることを重視してきた（宝月 2021: 360）。宝月によれば、移民による生活の再組織過程（トマ

スとズナニエツキ）から、黒人居住地の拡大（パーク）、更には非行少年の生活史（ショウ）、マリファナ使用者が常習者になる過程（ベッカー）に至るまで、必ずしも「因果」関係の究明に囚われることなく、「出来事自体を生成していくものと捉え、生成過程の説明を主題」とする方法論こそ、シカゴ学派に継承され続けてきたものであり、また我々がシカゴ学派から継承すべきものであるという（宝月 2021: 360, 374-6, 382）。ベッカーを始めとしてブルーマー、グラウンデッド・セオリーなどの第二次シカゴ学派の重要な功績は、その内容は少しずつ異にしながらも、一貫してそうした方法プログラムを精緻化してきた点にあるという。

一方で松本は、「因果」をキーワードとしてシカゴ学派黄金期以降の学説を整理していく。

松本のみが触れているトピックで最も重要なものの一つは、ワースの記念碑的論文「生活様式としてのアーバニズム」（1938）である。生態学に基づき、抽象的な水準でコミュニティの解体を論じるワース論文は、「一九二〇年代に集中していたシカゴにおける都市研究」を「理論的総括」するシカゴ学派の〈終わり〉であった。しかし他方では、その後シカゴ学派を代表する批判／継承対象と見なされていく点で、「都市社会学」としての「シカゴ学派」構築の〈始まり〉の役割も果たした。そのため、ワース論文は松本の描くストーリーにとって最も重要な転換点として位置づけられている（松本 2021: 24, 76-7）。

ワースの議論は、都市（の効果）、すなわち規模・密度・異質性という 3 つの独立変数から、従属変数としてのコミュニティ解体を説明するものである。松本はワースが用意した因果関係の図式を援用することで、ワース以降の都市研究の展開を整理している（松本 2021: 82-5, 171-2）。すなわち、ウェルマンは従属変数としての地域コミュニティについて、喪失でも存続でもない解放へと議論を進めた。ガンズは独立変数としての都市の効果に疑義を呈した。これに対して、フィッシャーはあくまでもパーク-ワース流の生態学を基礎とすることでガンズの批判を乗り越えようとした。つまり松本の整理では、修正シカゴ学派やハーバード構造主義などの戦後の都市・コミュニティ研究は、ワースが土台をつくった生態学の因果図式に改善を図ることによって展開してきたものとして理解できるのである。

ところが、シカゴ学派が都市社会学の正統的古典として位置づけられていく過程で、これらの蓄積は見失われていくこととなる。すなわち、従来の都市社会学が固有領域としての都市を定義し損なってきたというカステルの「都市イデオロギー批判」は、「ワースの生態学的決定理論を都市社会学と同一視して批判することで、都市社会学の問いそのものをイデオロギー的であるとして否定」してしまうものであった（松本 2021: 232）。1970 年代以降の都市研究は、コミュニティの再統合や秩序を見出すことによって、社会解体を強調する 1920 年代のシカゴ・モノグラフの視点をアップデートするものだったが、両者の違いも無視されることとなる（松本 2021: 241）。

改めて、松本の視点によれば、ワース以降の都市・コミュニティ研究は、それを従属変数／独立変数のどちらかとみなし、その効果や因果を測定する研究として発展を遂げてきたと整理できる。これに対しカステルは、これまでの都市社会学は従属・独立のいずれにせよ都市を固有の変数として定義することに失敗してきた、としてまとめて批判した。よく知られる「集合的消費」の概念は、カステルがこれに代わる新しい説明変数として導入を図ったも

のだったが、その過程で旧来の都市社会学の貢献も見失われることとなった。

したがって、都市が因果関係にどう組み込まれるかを軸にして、シカゴ学派以降の都市研究を整理した松本と、第二次シカゴ学派以降、因果ではなく過程による説明が深化した点を評価し、そこにシカゴ学派の方法論の神髄を読み取ろうとする宝月との間には、やはり大きなコントラストが存在する。松本の視点からすれば、ブルーマーやベッカーらが第二次シカゴ学派として注目され、シカゴ社会学の伝統が都市社会学として位置づけられていく 1960 年代は、皮肉にもシカゴ学派が対象＝フィールド＝空間＝都市としてのシカゴそのものからは離れていく時期でもあった。しかし宝月的な社会的世界論の関心からすれば、彼らの時代にこそ方法論をめぐる議論が成熟を見せる。黄金期以降のシカゴ学派がいかに継承され、また私たちがいかに継承可能であるかについては、生態学を焦点とするか、社会的世界論を焦点とするかによって、その見え方が大きく異なってくるのである。

ここまで本節では、両著作の異同を中心として包括的に整理・検討してきた。要約すれば、それは①「時間」・「空間」をめぐる問題関心、②シカゴ学派を捉える輪郭としての「科学」・「学派」、③黄金期以降の研究がシカゴ学派に見出してきた「過程」・「因果」をめぐる違いとして整理できる。こうした違いは宝月が社会的世界論の視点を、松本が生態学的な視点をシカゴ学派のもっとも重要な理論的含意と見なしていることに基づいて生じているものである。

では、それらの認識利得と可能性を、私たちはどのように引き継いでいけばよいだろうか。本稿では第 4 節で松本の議論を、第 5 節で宝月の議論を更に拡張し、両者が触れられていなかった最新の研究動向も補いながら、その理解・継承可能性を述べたい。

松本はシカゴ社会学の背後にある生態学的視点に可能性を見出しており、その生態学的研究の一つの到達点としてサンプソンを位置づけている。事実サンプソンは、シカゴ学派・生態学的視点の系譜を汲んだ近隣効果の分野を牽引する研究者であり、社会学の中心テーマの一つである格差・不平等を考える上でのシカゴ学派的な関心の今日的重要性を示してきた。ただしここで注意が必要なのは、生態学的な視点の実証研究への応用は順風満帆に進んできたわけではないという点である。歴史的に見て、生態学的視点を用いて集合レベルの水準に焦点を当てた研究は何度も困難に直面し停滞した時期が存在した。サンプソンの研究から生態学的視点の可能性を引き出すためには、サンプソンが生態学的研究の困難を克服する道筋を自らの研究の中で提示した点を評価しなければならないが、その点についてはこの書評で扱った 2 冊では深堀りされていない。そこで第 4 節ではサンプソンの業績を振り変えることで、サンプソンはそれら生態学的研究の困難をいかに乗り越え、シカゴ学派の再解釈を試みたのかを見ていきたい。これまで日本の都市社会学ではシカゴ学派の生態学的視点を用いた研究が数多くなされてきた。サンプソンの試みの学説史的意義を捉え直すことは、今後の日本における都市研究の理論的・実証的進展のための補助線となるだろう。

5 節では、社会的世界論の学説史的背景を踏まえることで、宝月による社会的世界論の理論的貢献をより明瞭にし、その実証研究への応用可能性を模索したい。宝月は著書の終盤にかけて「社会的世界」を探求するシカゴ学派の視座に力点を置いて議論を展開していく。「最小のスケールから最大のスケールまで、あらゆる社会的世界を研究できる」（Strauss 1978: 119）

とされた社会的世界の視座は、後に述べるストラウス、ベッカー、クラークなどを代表的論者としている。1980 年代以降は特に科学技術社会論（STS）の枠組みとしても使用されており（Clarke and Star 2008; Clarke and Fujimura 1992）、その他にも、芸術（Becker 1982=2016）、長距離走（Robinson et al.2014）、クライミング（Kacperczyk 2019）、飲酒（MacLean et al. 2021）などさまざまな小世界の探求に応用されている。

しかしながら、本書では上記の前提に深く触れられないまま、宝月自身の「社会的世界論」が（7 章を中心に）展開されているために、両者の異同が不明瞭になっている。5 節では、ストラウスなどの主要な論者に触れながら、社会的世界論の概要を補足し、宝月の議論と比較することで、宝月の主張とその価値を明確にしたい。

4　サンプソンはいかにシカゴ学派を引き継いだか

4–1　サンプソンの研究をいかに評価すべきか

松本は「なぜ不死鳥は飛び続けているのか」(松本 2021: 3) と問い、生態学的変数に独自の意味を見出す「シカゴ学派」の研究群が盛衰を繰り返す歴史を描いてきた。サンプソンの都市研究は、松本、宝月双方によってシカゴ学派の到達点とされ高く評価されている。松本は、2002 年のシカゴ学派対 LA 学派の論争において、サンプソンが「シカゴ学派を、都市と地域のコミュニティ変動へのマルチ・レベルのアプローチとして再解釈」(松本 2021: 262) しており、サンプソンによるシカゴ学派の生態学的視点を引き継いだ研究は「最先端の分析視点」(松本 2021: 255) になりつつあると評価している。また宝月は、サンプソンの集合的効力 (Collective Efficacy) の理論はショウやコーンハウザーによる社会解体論の研究を発展させ測定可能にしたもので、サンプソンが 2012 年に出版した『偉大なアメリカの都市』(Sampson 2012) は「コミュニティを基盤にして人々の生活を研究する」シカゴ学派の伝統をそのまま引き継いだ実証研究であり、「シカゴ学派の都市研究の現在の到達点」(宝月 2021: 240) を示すものと評している。

サンプソンの『偉大なアメリカの都市』は 2012 年刊行ながら既に都市研究、とりわけ近隣効果研究の新たな「古典」として広く認識されており、松本・宝月によるサンプソンへの高い評価は妥当であろう。確かにサンプソンの研究はシカゴ学派的アプローチ、特に生態学的視点の復権を牽引していて松本が「不死鳥」と形容するような状態にある。ただし両書の目指す方向性の関係もあって、サンプソンが現代においてシカゴ学派的アプローチを再び可能にした諸々の条件には何なのか、サンプソンは都市社会学のいかなる方法論・理論的課題を超えようとしてきたのかについては十分に触れられているとは言い難い。「不死鳥」は単に偶然復活したり、単線的な都市社会学の発展によって必然的に復活したりしたものではない。サンプソンの都市研究は両書で紹介されてきたもの以外にも多岐にわたるが、サンプソンの研究が高く評価され都市・近隣研究の旗手として見做されている理由を理解し、そしてサンプソンが行った諸々の実証研究や提示した理論の学説史的意義を見出すためには、集合的な特徴に着目する生態学的視点の研究が長年に渡って困難な課題を構造的に抱えていたこと、そしてサンプソンがこれをクリアする一つの方法を編み出したことを把握する必要がある [1]。

4–2　生態学的な研究それ自体の困難

まず、シカゴ学派が初期から持ち合わせていた生態学視点――個人属性に還元し得ない集合的な現象を分析すること――を用いた研究それ自体の発展の過程を社会学の歴史を紐解きながら見ていこう。松本は、1940 年代以降シカゴ学派が衰退した理由として生態学的視点が「忘れ去られた」(松本 2021: 255) ことを挙げている。しかし実態としては生態学的視点を用いた研究それ自体が非常にハードルの高い性質を持ち合わせていたため、生態学的視点を扱うための方法論的開発の必要性は認識されながらもうまく進展しなかったと考えられる。

松本は著作の第 3 章にて、計量革命の立役者となったラザースフェルドをシカゴ学派とは別のパラダイムを打ち立てた人物として描いている。しかし、ラザースフェルドの研究遍歴を見てみると、ラザースフェルドとシカゴ学派の間での断絶が最初から存在していたわけではない。ラザースフェルド自身もシカゴ学派の生態学的研究を評価・参照しており (Coleman 1980)、またコミュニティ研究において集合的要素に焦点を当てた分析を試みた形跡がある [2]。ラザースフェルドは社会現象の集合的プロセスを、①Analytical な個人単位の特性（近隣における居住者の平均年収など）、②Structural な個人間の関係（友人関係のネットワーク密度など）、③Global な非個人単位の特性（個人の属性に還元されない集団の特徴や創発的特徴）の 3 種類に分類した (Lazarsfeld and Menzel 1961)。このラザースフェルドの集合的プロセスの探求の試みは理論的には重要な整理であったが、結局はラザースフェルドの関心も個人の行動に移り (Coleman 1980)、方法論的個人主義に基づく Analytical な分析が席巻しコミュニティレベルの研究は十分に発展することはなかった (Sampson 2010)。確かにシカゴ学派が新たなパラダイムの中で時代遅れになったという側面はあるが、方法論的個人主義ではないシカゴ的な視点から集合的な現象――ラザースフェルドのいう Global な現象――を扱うために必要な手法が、当時の水準では見つけられなかったと考えた方が良い。

その後 20 世紀末にかけても、集合的な現象の適切な扱い方については、都市研究の分野において答えが出されないままであった。ウィルソンが 1987 年に出版した『アメリカのアンダークラス 本当に不利な立場に置かれた人々』では、貧困層の集住した近隣の集合的な特性が貧困再生産の要因になっていることが指摘され、それ以来現代に至るまで近隣に着目した近隣効果研究が隆盛することとなる。しかし、ウィルソンの主張する近隣の集合的な特性が本当に存在するかは、計量的な立場からは長らく疑問視されることになる。例えば、近隣効果の存在をめぐり先駆けて既存研究のレビューを行ったマイヤーとジェンクスは近隣単位の変数が効果を持つかに関して「悲観的」(Sampson et al. 2002: 443) であった。マイヤーとジェンクスは地域の人々の社会経済的地位の平均値を近隣の指標として用いた場合、個々のアウトカムに対する影響は微弱であり、さらに少年犯罪や性的行動、労働市場へのアクセスに関する研究では近隣の効果があるかもしれないが、これらの結果を導き出すのに用いられている研究は様々な方法論的問題を抱えており、より良いモデルを使って検証した場合、近隣の影響はさらに小さくなるのではないのかと考えた (Mayer and Jencks 1989: 1444)。近隣効果の黎明期の研究においては、質的研究は近隣効果の存在を強く支持するものが多かったが、計量研究はこれに懐疑的なものが多く (Small and Feldman 2012: 4) 、近隣が重要な単位である

という主張は必ずしもすぐに受け入れられたわけではなかった。

4–3　サンプソンの試み―測定と分析方法の開発

このように、シカゴ学派のいう地域単位の生態学的な現象を量的研究に落とし込む方法はここ 100 年のあいだ様々な検討がなされてきたが、どのように個人属性に還元し得ない集合的な現象を測定するのか、そしてどのように統計的に処理するのかは常に課題であり続けた。サンプソンの実証研究が高く評価される理由の一つには、この問題について正面から取り組み、計量的に地域単位の生態学的な特徴を扱うための道筋を示したことにある。サンプソンの研究は多岐にわたるが、その中でも集合的効力と近隣効果の研究をそれぞれどのように行い、これら課題を処理してきたのか見てみよう。

サンプソンによる集合的効力の理論は、宝月の著作の第 4 章で一通り説明されているので詳細はそちらを参照されたいが（宝月 2021: 239-241）、集合的効力とは「社会的凝集性」と「インフォーマルな社会統制」の 2 つの次元からなり、前者は地域内での信頼について、後者は問題が起こったときの介入への期待についての合成変数になっている。サンプソンがこの集合的効力の概念を生み出した背景としては、逸脱を研究する当時の社会解体論・割れ窓理論の逸脱が逸脱を生み出すというトートロジカルな議論の組み立てへの疑問が存在していたことがまず挙げられる (Sampson 2006)。そしてサンプソンは逸脱現象が発生する構造を、都市におけるネットワークの形を表したフィッシャーの友人ネットワーク研究やウェルマンのコミュニティ解放論、グラノベッターの弱い紐帯の議論、ウィルソンによる剥奪された近隣において観察される強固なネットワークが必ずしも秩序をもたらさない問題、ホワイトのストリートコーナから続くネットワークの二面性の問題 (Sampson 2006: 原田 2016) 等を踏まえ、単純に住民間のネットワークの強弱や統制の問題として扱うことなく、コミュニティの中で発生するプロセスとして扱える変数を作り上げた。このように集合的な現象を直接測定可能なように概念設定し、実証研究を行っている点がサンプソンの議論の強みであった。宝月はサンプソンらの実証研究 (Sampson et al. 1997) を踏まえ、集合的効力の分析は「コミュニティの構造的要因 (貧困の集中度・住民の定着率・土地利用と密度) →コミュニティの集合的効力 (信頼性・連帯・社会的コントロールへの参加の意思) の水準→各コミュニティの逸脱率」(宝月 2021: 240) と定式化していることを評価しているが、サンプソンの議論の建て方は、単純に集合的効力の有無を分析をしているのでなく、集合的効力がコミュニティを取り巻く構造的要因からどのように影響を受けるかを考慮に入れたモデルの構築になっている。サンプソンは後にシカゴの近隣における集合的効力の経時的変化のメカニズムを分析し、都市内の近隣の特性はそこに住まう人が入れ替わりつつも何十年単位で持続する強力なものであることを論じている (Sampson 2012)。集合的効力の理論の射程に都市の構造自体の分析が入っている点に、サンプソンの議論の巧みさがあると言っていいだろう。また、1997 年のサンプソンらの実証研究 (Sampson et al. 1997) は社会学においてマルチ・レベルモデルを取り入れた先駆的な研究であり、当時のコミュニティに関する理論において提示されていた集合的効力以外の様々なメカニズムを考慮したとしても、集合的効力がなお重要であることを注意深く論じ示している。近年では統計的因果推論の手法によってより因果的に洗練された手法で解

析されているが、まさにこの近隣で発生するプロセスを表す変数を作成し、計量分析に落とし込んだ作業こそが従来の (都市) 社会学の研究において量的な分析が進まなかった集合的な特徴への対処の成功例である。

またここでサンプソンはローデンブッシュらとともに、科学的な生態学的測定に向け、近隣のメカニズムを直接的に計測する為のシステマティックな手続きの開発と、近隣レベルでの測定の質を改善するため心理統計学のツールを適用及び統合することでエコノメトリクス (Ecometrics) という手法を開発している (Raudenbush and Sampson 1999)。このことも、生態学的研究の進展という点では見逃せない。この手法は 1995 年から開始した大規模な追跡調査である「シカゴ近隣地区人間発達プロジェクト」（Project on Human Development in Chicago Neighborhoods）において近隣の状態の測定手法として活用されており、この調査プロジェクトのデータは近年に至るまで近隣研究の重要なリソースとして活用されている。

次に、近隣効果と呼ばれる、不利な近隣に居住することそれ自体の悪影響を分析する研究がウィルソンの 1987 年の『アメリカのアンダークラス 本当に不利な立場に置かれた人々』以来社会学の都市・貧困研究の分野で隆盛しているが、この近隣効果が存在するかは前述の通り懐疑的に見られる時代が存在した。その理由の 1 つは、近隣の効果を推定する上では統計学的な困難、しばしばセレクションバイアスとして整理される問題が存在したためである (Bergström and van Ham 2010, Small and Feldman 2012, Sharkey and Faber 2014)。例えば、貧困再生産に関連が深い指標である学業達成率や犯罪・逸脱行動の表出率が近隣によって異なる場合、それが移住した人々の特徴（＝構成効果）の差異によるものなのか、それとも近隣の特性の効果（＝文脈効果）なのか、近隣の効果を特定する上では両者は概念上異なるものであるので峻別しなければならい。しかし、人々がどの近隣に引っ越すかはランダムではなく、つまり近隣という処置への割付にセレクションが発生するので、不利な近隣の居住者とそうでない近隣の居住者を単純に比較しようとした場合、近隣の効果の推定にバイアスが発生してしまう [3]。

そこで必要になってくるのが、統計的因果推論の考え方になる。いわゆる「KKV 論争」などを経るなかで、因果推論の枠組みは実証社会科学の世界において支配的な位置を占めるようになってきた（筒井 2016）。その中でサンプソンは、近隣効果は単純に構成効果と文脈効果に分割して後者だけ推定するのでなく双方を分析対象とすべきであるとしている（Sampson 2012) が、これはサンプソンが近隣にまつわる研究において統計的因果推論や実験の考え方を軽視や否定してもよいと主張しているわけでは決してない点に注意が必要である。例えばサンプソンらによる 2008 年の研究で、統計的因果推論の手法を用いて黒人の子どもが剝奪された近隣で育つと 1 年以上学校に通わなかった場合と同等の言語能力の低下を引き起こすことを推定している (Sampson et al. 2008) が、この論文では統計的因果推論の手法は近隣に付随して起こる重要な現象を特定し後続の研究を発展させていく上で強力なツールであることが指摘されている。

また、多くの近隣研究が近隣の効果があるかないかの二分法に陥っている (Sharkey and Faber 2014) ことを、サンプソンも長らく問題視してきた。そのような二分法的な研究では、

もし仮に人々が不利な近隣に住んでいた場合と、そうでない近隣に住んでいた場合の潜在的なアウトカムの差を推定することで、特定の近隣に住まうことの効果を推定していた。しかしサンプソンはそのような単純な因果推論の研究には批判的で、そのような研究は①実際に起っている文脈やプロセスを捉えらず、②そして実験においても統計的手法を利用するにあたっても、因果的な言明には背景となるメカニズムの説明が必要 (Sampson 2012: 380) とする。このような単純な因果推論では不十分な研究になってしまうという問題、例えば近隣効果の分析の際に、個人、家族、友人、学校に関する変数を統制変数として扱った場合、長期にわたるコミュニティの影響や発展的な経路の影響の重要性を無視する可能性があることを、サンプソンは既に 2002 年に出版した近隣効果に関するレビュー論文の時点ではすでに問題視していたのであるが (Sampson et al. 2002)、例えばサンプソンの参加した 2019 年の論文では残差による回帰を用いた構造ネスト平均モデルによる分析によって、これらの統計処理上・分析枠組み上の問題を回避して、時間とともに変化する近隣と個人の関係をモデル化した因果推論による分析を行っている (Levy et al. 2019)。21 世紀に入ってから統計的因果推論の手法は急速に発展しており、今後の量的な近隣研究は、バイアスの問題をより上手に処理し、近隣で働くダイナミックなプロセスにより迫る方向へ進展するだろう。

また、多くの近隣効果研究において個々人の居住地をその人が住む近隣として定義して分析を行なうが、人々は日々近隣間を移動するのであり、サンプソンはこの操作的で静的な近隣理解を拡張した分析が必要だとする。サンプソンらは近年の研究で、SNS ユーザーが投稿した数億件のツイートから推定される移動パターンをジオコーディングして、有利な近隣・中間層の近隣・不利な近隣の間でどのように人々が移動しているか、交流のパターンを解析している（Levy et al. 2020）。この研究では、地域のウェルビーイングを近隣それ自体の社会経済的条件だけでなく、近隣の住民が訪れたり訪れられたりする近隣の条件、すなわち日常的な都市の移動のネットワークを通じて形成されるつながりの面からの解析がなされている。これはゾーボーが『ゴールド・コーストとスラム』で行った都市の様々な区域間で織り成される相互作用の分析 (Zorbaugh 1929=1997) を、現代的な手法を活用し復活させた研究と位置づけることができるだろう。

4–4　サンプソンの理論観

これら集合的効力や近隣効果研究において、サンプソンは測定方法や統計学的手法に注意を払い、時空間上のプロセスを描くことを重視した実証研究を志向してきたのであるが、同時にいかなる分析を組み合わせれば都市の研究・社会学の研究として望ましいのかという問題について明快なヴィジョンを持ち合わせていた。

サンプソンのシカゴ学派的な立場は松本の著作の終章で既に紹介されていたが、事実サンプソンは『アメリカの偉大な都市』において、生態学的視点の物理的環境の過度の強調や政治経済の影響の軽視の批判が存在することを踏まえた上で、「人間生態学の中心的な対象は全体的なシステムの中での個人と環境の相互作用——正しい理解としては時空間上の社会的相互作用とその社会レベルの結果——である」(Sampson 2012:383 著者翻訳) とシカゴ学派の生態学的アプローチを解釈している。そしてサンプソンは「シカゴは、社会的（そして地理的）空

間と社会的時間における文脈から抽象化されたいかなる社会的事実も理解できない」(Abbott 1999[1997]=2011: 264)）とするシカゴ学派の文脈主義的なパラダイムが、絶えず変化する都市の経験的世界を理論と操作的概念を結びつける頑健なアプローチ (Sampson 2012: 68) であると評価し、サンプソンの実証研究はこの理論的立場に対応する形で展開される。サンプソンは『アメリカの偉大な都市』において、単純な因果推論や、二分法的な研究に陥りがちな近隣効果の研究は批判の対象であり、近隣を以下のように理解することで近隣交換の研究対象を拡張するべきとする。

> 人々は近隣の違いに対して反応を示す。そしてその反応は、社会的メカニズムと実践を構成し、それは次に、認識、相互関係、行動を方向づけ、それは古典的な近隣の境界の内部とその外側双方に影響し、さらにはともに都市の社会構造を規定する。（Sampson 2012: 21 著者翻訳)

宝月はウィルソンの研究を評価する文脈で「マクロな社会過程に伴うさまざまな要因とそれらのメカニズムの連関が生み出す全体のプロセスの作用を同定し、それらがコミュニティの社会的コントロールに及ぼす影響を判断することが、シカゴ学派の社会解体論の本来の課題であったと思われる」(宝月 2021: 257) と述べていたが、この課題は実のところサンプソンの研究に明確に引き継がれている。

そして、サンプソンはこの近隣効果の概念の拡張の議論をもとに、都市研究が解明すべきミクロ・マクロリンクの概念モデル (図 1) を提示する。この図の上部は近隣の水準であり、下部が個人の水準である。サンプソンはここで既存の社会学の研究の多くが、4 の研究、近隣間の変数の関係の研究 (たとえば、近隣の貧困率と近隣の犯罪率の関係) に終始してきたこと、一般的な社会科学の研究では 2 の個人レベルの関係のみを研究の対象としてきたことを問題視する。サンプソンは、近隣効果の研究においては 1 の近隣の社会構造や文化が個人の認識や行動傾向・相互作用に与える影響や、3 の個人の行動や選択が近隣レベルの社会的特性を作り出す点を含め、このミクロ・マクロリンクの総体的なプロセス全体を見ることを解明課題として設定しているのである。

4–5　小括

以上、簡略にではあるがサンプソンの研究がどのように既存の研究の壁を超え、シカゴ学派的パースペクティブの復活を現代に可能にしたのかを見てきた。サンプソンは、集合的な現象を分析するための概念セットの緻密な操作化と、時代時代の最新の計量手法を活用したことにより、従来は扱いにくかった集合的現象を扱う道筋をつけた [4]。さらにそのサンプソンの諸々の実証研究は、都市をいかにして分析するべきかというサンプソン自身のビジョンと呼応して展開されていたのである。

松本・宝月の両著作においてシカゴ学派の理論が様々な角度から論じられていたが、アーベントが指摘するように社会学において理論が指す意味は複数ある (Abend 2008)。この考えを踏まえてシカゴ学派の理論とされていたものを整理すると、都市における様々な現象の解釈や、生態学的な法則の確立といった経験的なレイヤーに属するものと、時空間上の社会的

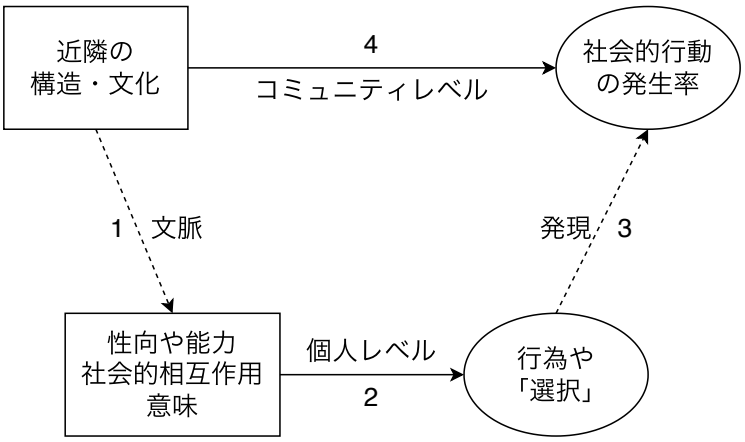

図 1　近隣のミクロ・マクロリンクの概念図式。 (Sampson 2012: 63 著者翻訳) より

相互作用の記述を社会学的な解明課題とする認識論的なレイヤーに属するものと、二層に分かれている。その点において、サンプソンは一方で都市分析のための明確なフレームを提示し、また一方で現代の社会（科）学の基準における頑健な経験的分析を行い、シカゴ学派における理論の二層のレイヤーの両方に跨った研究を展開してきた。松本は「シカゴのゆるい語彙体系の中に、何か新しい理論的再構成のヒントを見出すものだけが、シカゴ社会学を理論的に読むことができる」(松本 2021: 257) と指摘していたが、サンプソンの研究は以上の 2 つの作業を同時に進めることでシカゴ学派のパースペクティブの再構成に成功したといえるだろう。集合的な現象の分析を試みつつも失敗した数多くの研究によって残された課題は、サンプソンによってこのような形で整理され乗り越えられてきた。21 世紀の都市・近隣研究においてシカゴが「不死鳥」として蘇った背景は、こうした経緯が存在するのである。

5　シカゴ学派と宝月の社会的世界論

本節では、シカゴ学派による「社会的世界論」の変遷と特徴を踏まえて、宝月の「社会的世界論」がいかなる特徴を持つかについて検討する。2 節で紹介したように、宝月はシカゴ・モノグラフの事例の検討から抽出された社会的世界論を展開している（宝月 2021: 393-460）。

通常、読者は本書にシカゴ学派で彫琢されてきた社会的世界論の紹介や検討を期待するかもしれない。しかし宝月は、シカゴ学派におけるその蓄積にはあまり触れないままに自らの社会的世界論を展開しており、シカゴ学派の社会的世界論と宝月独自の論点が不明瞭になってしまっている。本節ではこれらを整理しつつ、宝月が本書によっていかなる理論的貢献を果たしたのかを、これまでの社会的世界論の系譜に位置づけ、実証研究への応用可能性を模索する。

5–1　社会的世界概念の変遷

まずは、宝月によって必ずしも詳しくまとめられていない、社会的世界概念の変遷について補足したい。前述したように、宝月は社会的世界論を「新たな」視点としているものの、社

会的世界が視座として理論的に語られるのは初めてではない。後述するように社会的世界論は、シンボリック相互作用論のシカゴ学派の社会学者を中心に研究の蓄積がある。宝月においても、著作の英題に「Social World Perspective（and Method）」というキーワードを用いており、明らかに後述するシカゴ学派の論者の影響を受けていることが推察される。まずは、シカゴ学派による社会的世界論の基本的なエッセンスを確認することからはじめたい。

シカゴ学派の社会的世界論は、A. ストラウスが Studies in Symbolic Interaction 誌の創刊号に載せた論文”A Social World Perspective”に端を発する（Strauss 1978）。ストラウスは、シカゴ学派がさまざまな形で述べてきた「社会的世界」というキーワードを概念化しようとした。ストラウスによれば、この言葉は時に記述的に、時に概念として用いられてきた（Strauss 1978: 119）。社会的世界という言葉は、例えばクレッシー『タクシーダンス・ホール』（Cressey 1932=2017）などのシカゴモノグラフに散見され、理論的には T. シブタニの準拠集団論にインスピレーションを受けていたものと位置付けられる（Shibutani 1955; Strauss 1978; Unruh 1980）。

社会的世界論は、論者によって重要な点は若干異なるが、前述したストラウスの “A Social World Perspective” が他の論者にも大きな影響を与え、かつ簡潔に概要を述べているので紹介したい。一言で述べると、シカゴ学派における社会的世界は特定の空間においてアクターが、何らかの資源が活用された活動を反復する中で一定の規範を生み出し、生成される経験的領域である[5]。社会的世界では、優先的になされる特定の活動（activity）が存在し、その活動は一定の空間・場所（site）で反復的に行われる。活動には技術や資源が活用され、共有された考え方がある。社会的世界において、最初は一時的だった分業は発展し、分業に基づく活動が組織される。社会的世界は発展につれてサブ世界に環節化（segmentation）する。そして、社会的世界同士は互いに交差（intersection）することで、世界間でさまざまな問題をめぐり交渉や闘争を行うアリーナ（arena）が発生する。社会的世界やアリーナはある程度構造化されるが固定化することはなく、社会的世界の境界や活動は、絶えず変化していく過程として捉えることができる。このようなシカゴ学派の社会的世界論は、社会的世界の構成要素と社会的世界の発展に関する言及が中心であり「社会的世界をいかに認識するか」という点に貢献してきた視座であると位置付けることができる[6]。

5–2　宝月による「社会的世界論」

続いて、宝月による社会的世界論への言及に着目する。宝月は、社会的世界論について本書以外にも言及を行っており、その中で議論の変遷を確認することができる。2005 年時点において、宝月はストラウスの社会的世界論の概説に注力しながら、社会的世界の視座を「理論的視点というよりは記述的な概念で、特定の地域や集団によって営まれている社会生活の有様」（宝月 2005: 3-4）と評価した上で、この視座を逸脱や社会的コントロールに関する記述の解釈に援用している。その後 2010 年の論文では、第 2 次シカゴ学派のブルーマーやヒューズ、ベッカーやストラウスといった論者の視点において重視／軽視されている点がまとめられ（宝月 2010）、宝月自身が取り組んだ逸脱研究の文脈に沿って、社会的コントロールや社会的位置などの論点が付け加えられた上で、社会的世界論の骨子が 6 つの命題にまとめられ

ている[7]。

そして、2021 年の著書は理論的な概念規定に加えて、新たに社会的世界におけるデータの収集・推論・検証・一般化に至る方法論を含んだ広義の「理論」を打ち立てている（宝月 2021）。ここでいう方法論とは、新しい方法論そのものというよりは、具体的に実証研究を行うにあたっての留意点や方向性を示す意図がある。それはより具体的には、注意を払うべきデータについて、選択性のバイアスを回避することについて、完全なデータを推論で補うことについてなどのデータ収集に関わる次元や、データがエビデンスに値するものであること、同語反復や事後解釈の問題を回避することなどの科学的ルールへの言及がされている（宝月 2021: 453-4）。さらに、このようにして社会的世界論によって得られた知を、その社会的世界に生きる人々にフィードバックする必要性についても宝月は強調している。これらの点は本稿で前述したように、宝月における「科学」への志向が如実に現れている。

前述したシカゴ学派の社会的世界論と比較して宝月の社会的世界論は、2 点のオリジナリティを指摘すべきだろう。1 点目は宝月自身も述べているように「出来事と経験からなる社会的世界と、その背後で作用すると理論的に想定される社会的存在を媒介する」（宝月 2021: 397）ものとして方法論を位置付け、社会的世界を熟知した上で、理論的視点に基づいてデータを整理し、推論の上で解釈や説明を試みた上で妥当性を検証することである。宝月の社会的世界論で展開される社会的存在の構成要素は「意味世界」／「制度」／「相互行為」など、シカゴ学派のエッセンスに溢れたものになっている[8]。このような流れからも、宝月の社会的世界論は、シカゴ学派の流れを組んだ論者たちによって展開された社会的世界を認識するための理論としての「社会的世界論」に加えて、研究成果をまとめるまでの方法論が加わったものとして位置付けることができよう。

2 点目に宝月の特徴は、社会的世界論において「ストーリー」というキーワードを導入したことである。宝月によれば、「社会的世界論の目的は最終的には一連の出来事や経験からなる社会的世界についてのストーリーを語ること」（宝月 2021: 437）である。ストーリーとは、「社会的世界がいかなる世界であるか」と「それがどのように生成していくのか」（宝月 2021: 437）についてのストーリーである。つまり、宝月の社会的世界論はただその社会的世界を記述するだけではなく、社会的世界の生成過程やさまざまなメカニズムの付置に目を向けることによって、当該の社会的世界オリジナルのストーリーを示すことに狙いがある。この点はシカゴ学派の社会的世界論にはないオリジナリティであり、3 節で前述したような宝月の「時間」を重視する姿勢が現れている。

5–3　小活

以上において宝月による社会的世界論は、シカゴ学派の社会的世界論を発展させる含意があると位置付けられる。端的にはそれは、従来のシカゴ学派にある社会的世界の認識に関わる議論だけでなく、方法論を媒介にしながら経験世界と背後の社会的存在との関わりを論じ、社会的世界のストーリーの生成に焦点を当てる意図があった。

ただし、この評価に対しては、以下の 2 点に留意する必要がある。1 点目に、宝月の社会的世界論における、社会的世界同士の交差についてである。宝月は自身の社会的世界論にお

いて、背後の社会的存在との関わりを強調している。この点は確かに非常に重要な点である。そもそも小世界は、マクロな社会の中に不可避に埋め込まれており、これらからの影響を受けることを考察の範疇に入れることは重要である。社会的世界論の特徴を整理したウンルーも、社会的世界を完全に孤立したものとみなすのではなく、より大きな社会の側面に統合され、社会的に組織されるという点を重要視すべきであると主張している（Unruh 1980）。

しかしながらこの点を強調するあまりに、シカゴ学派が重要視してきた社会的世界同士の関わりについての言及が少ないことは指摘しておきたい。シカゴ学派における社会的世界同士の関わりはそもそも社会的世界論に限定するまでもなく、都市理論においても人間生態学の視点から、フィッシャーの「アーバニズムの下位文化理論」（Fischer 1984=1996）にいたるまで通じて論じられてきた。社会的世界論においてもサブ世界への分化、アリーナの発生といった論点はストラウスからの重要な論点である（Strauss 1978）。このような社会的世界同士の関わりが、自身の社会的世界論といかなる関係にあるかについてより詳細な言及が加わることで宝月の社会的世界論は発展の可能性があると思われる。

2 点目に社会的世界論と、方法論を媒介する姿勢についてである。例えば、クラークはストラウスの社会的世界論のフレームワークを基盤に、グラウンデッド・セオリーを拡張した「Situational Analysis」（Clarke 2003）というアプローチを生み出している。これはクラークとスターによって（社会的世界論／ Situational Analysis という意味で）「理論と方法のパッケージ」と呼ばれている（Clarke and Star 2008）。このように、社会的世界論に具体的な方法論を結びつけようとする思考は宝月に限った「新しい」ことではない。

上記のような懸念点はあるが、改めて宝月の社会的世界論は展望に満ちた新しい道筋が示された研究である。クラークとスターの言葉を借りれば、実証研究は「オントロジーとエピステモロジーの両方の観点において（対象と）フィットする」（Clarke and Star 2008: 130）必要がある。そもそも社会的世界論が埋没し、実証研究が希薄な日本の社会学研究において、改めて実証研究から理論を整理し、方法論へとつなぐ道筋を示した意義は大きく評価すべきである。

ただ、社会学において、ミクロな社会集団を捉えようとする理論や視座は現代に多く存在する。これらのなかでも、社会的世界論は支配的な視座とは言えないかもしれない。このような中で、社会的世界に迫る研究者がなおも社会的世界論を選択する積極的な価値はどのような点に見出せるだろうか。

このような想定される指摘に対し、実証研究へ肉薄するためには 2 点の更なる課題が残っているだろう。重要なことの 1 つは、理論的に社会的世界論そのものの価値を明確に強調することであり、本稿による検討からは、その一部が見て取れた。無論、本稿で行ったことは研究潮流の大まかな整理に止まっており、理論的源泉となっているシブタニや、ストラウス、ベッカー、クラークらの再検討によって、社会的世界論の価値が再評価される可能性があることは言うまでもない。

加えて、社会的世界論の積極的な価値をより明瞭にするために、社会的世界論と方向性をともにする社会理論、つまり社会における小世界に焦点を当てた理論との綿密な比較検討が

必要だと思われる[9]。宝月の著作においても批判的実在論／構築主義などとの関係について触れられている（宝月 2021: 449）ものの、これらはあくまで社会学全体における包括的な方向性に関わる議論であり、小世界に接近するための理論同士の比較検討は未だ不十分であろう。このような試みによって、調査者がある一定の社会事象を捉える際に、予備調査や調査設計を繰り返す中で、数ある社会理論から（宝月／シカゴ学派の）社会的世界論に着目する意義がより明確になると思われる。我々はまだ、社会的世界論を昔の産物と切り捨てるには早すぎる。

6　おわりに

本稿は松本・宝月の近刊を整理し、学説史的に位置づけることで、シカゴ学派の現代的な継承可能性という観点から両書の貢献を提示してきた。シカゴ学派の社会学は古典的地位が与えられていて、日本でも極めて多くの学説史研究が既に存在する。それでもなお両書が出版されたのは、単に松本・宝月の両氏が自らの研究人生に一区切りをつけたからというだけではない。サンプソンを筆頭に生態学が復権し、あるいは社会的実在論など新しい方法的立場が出現してくるなかで、シカゴ学派やその方法的立場の意義が問い直され、改めてその「可能性」が示されなくてはならなかったのである。本稿の前半部では、日本を代表するシカゴ学派研究者の二人がそうした課題にいかに応答しようとしてきたのか、またそれによってシカゴ学派がなぜ・いかにして異なる形で理解されてきたのか、両書の内容を紐解きながら整理してきた。

それを承けて本稿の後半部では、最新のものも含めて研究動向を補うことで両書を学説史的に位置づけ、両氏が見出したシカゴ学派の理論的含意について更なる検討をおこなった。社会的世界論やサンプソンがリードする近隣研究については、日本では海外に比べてほとんど紹介されておらず、松本・宝月の両氏も必ずしもフォローアップしきれているわけではない。本稿ではこれらの研究動向の文脈を踏まえることで、両書が明らかにしたシカゴ学派の意義をより明らかにすることを目指した。

4 節では、シカゴ学派の生態学的視点の研究をサンプソンがどのように再解釈したのか、そしてそれは生態学的研究のどのような困難を乗り越えようとする試みだったかを振り返ってきた。サンプソンの試みは、初期シカゴ学派の構想を現代の水準で実証研究に落とし込み、また同時にいかなる問いを都市の研究として解くべきかについての理論観を伴うものであった。松本、宝月が触れたサンプソンの功績は、都市社会学の歴史上の課題とリンクさせて考えることで、その学説史上の価値をより丁寧に位置づけることができる。

5 節では、宝月による社会的世界論とシカゴ学派の社会的世界論の差異を明らかにするために、学説史的展開を補足した。本稿でシカゴ学派の社会的世界論の展開を確認したことで、社会的世界論は決して宝月個人の主張ではなく、英語圏を中心に細々とその残火が見て取れるミクロな社会集団への視座の一つであることがわかった。しかし、日本における社会的世界論は、欧米圏における実証研究の試みとは裏腹に、理論的考察に止まるものが多く（片桐 1981; 大西 1988; 宝月 2010）、実証研究への道筋が明確に示されていなかった[10]。このような

背景から宝月が、方法論を媒介に社会的世界と社会的存在の接続を試みたことは、日本における社会的世界論を視座とした実証研究の可能性を目指したものであるに違いない。

これらのさらなる理論的発展の可能性や、日本における実証研究への応用可能性については、本稿を 1 つのたたき台として更なる考察を深めていくことができるだろう。

付記

本稿は JSPS 科学研究費助成事業（課題番号 20J15190, 20H01578）・JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム（JPMJSMP2123）の助成による成果の一部である。

また、有志による「シカゴ学派／都市社会学読書会」および、東京大学大学院人文社会研究科において 2021 年度に開催された祐成ゼミにおいて、松本・宝月の両著作に関して多くの議論が交わされ、本稿を執筆する上で大変刺激になった。記して感謝申し上げたい。

本稿を執筆するにあたっては 3 人の著者で作業を平等に分担した。第 2 節、第 3 節は宮地が、第 4 節は大和が、第 5 節は関が主に執筆し、第 1 節、第 6 節は共同で執筆している。

注

1 本節ではサンプソンの業績を紹介しているが、彼の業績は共著のものも非常に多く、米国のデータインフラを前提としており、社会学だけでなく隣接分野の専門家との共同作業の成果であることは留意されたい。

2 また同時期の 1940 年代に、ラザースフェルドが所長を務めていたコロンビア大学応用社会調査研究所でマートンは計画的コミュニティ (planned community) の調査を行っている。祐成 (2014) によると、マートンの分析は居住の場の形成をめぐる諸主体の間で展開される交渉の詳細な分析に踏み込むものであり、調査報告書自体は 1951 年に完成していたが公刊されることはなかった。ラザースフェルドやマートンがシカゴ学派の視点をどのように継承しようとしたのか、また断念したのかについては今後の学説史的研究が俟たれるところである。

3 近隣効果の文脈で出てくるセレクションバイアスという言葉は、論者や対象とするモデルによってその意味する内容が異なる場合がある。交絡因子によるバイアスや、時変共変量・時変処置を処理する際の合流点バイアスが問題となる場合が多い。セレクションバイアスの用語法及びバイアスが生じるパターンについては、Elwert and Winship(2014) を参照されたい。

4 米国において大規模なパネル調査や住民を転居させる実験が行われてきたなど、都市研究において利用できる統計データの強固なインフラが整備されていたことや、測定や分析のための各種テクノロジーの進歩が存在したことも、これらの研究が可能になった前提条件であった。

5 訳語などは（大西 1988; 宝月 2005: 4; 宝月 2010）から引用した。

6 例えば社会的世界論は「研究デザインのための『感覚的な概念』『発見的な装置』として採用」（MacLean 他 2021: 232）されることがある。

7 6 つの骨子は以下の通りである（宝月 2010: 52-6）

①社会的世界は行為者たちが特定の意味世界の下で、社会関係を構成し、資源を活用してなんらかの行為を遂行している世界である

②社会的世界は他の社会的世界と関係を有している

③社会的世界は固定したものではなくて生成していく

④意味世界の制度化によって社会的世界の存続と制度的行為が可能となる

⑤社会的世界が生成していくためには、社会的世界において生じる問題状況に対処する必要がある

⑥社会的世界の生成過程はその構成要素とシステムの変化から捉えることができる

8 加えて宝月は、シカゴ学派以外の論者からも柔軟に構成要素を取り入れ、ブルデューから着想を得

た「社会的位置」の重要性に関しても言及している。

9 実際にその実践は各所で確認できる。例えば、P. ブルデューによる「champ」概念と社会的世界論の比較はその代表的事例である（Bottero and Crossley 2011; Lahire 2012=2016: 150-1; Becker 1982=2016: 410）。端的に述べると、ブルデューが客観的な関係を重視する一方で、社会的世界論は主観的な関係を重視するといった指摘（Bottero and Crossley 2011）や、両者が焦点としたいアクターの範疇についての差異が論じられている（Lahire 2012=2016: 150-1; Becker 1982=2016: 410）。

加えて、社会的世界論とアクターネットワーク理論（ANT）は、科学技術社会論の新旧世代の視座として比較の俎上に上がっている（Clarke and Star 2008: 122-23）。クラークとスターは、社会的世界論と ANT について、前者が行為者の視点が多元主義的でアメリカ（社会学）的であるのに対し、後者では権力の中央集権性がフランス（社会学）的であると、両者の差異を強調している（Clarke and Star 2008: 122-3）。

10 例外的に、宝月編著による『社会的コントロールの現在』は、社会的世界論のエッセンスを援用した論考が収録されている（宝月編 2005）。

文献

Abbott, Andrew, 1999, *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*, Chicago :University of Chicago Press.（松本康・任雪飛訳，2011,『社会学科と社会学——シカゴ社会学百年の真相』ハーベスト社.）

Abend, Gabriel, 2008, “The Meaning of ’Theory’,” Sociological Theory, 26(2): 173-99.

Becker, Howard S., 1982, *Art Worlds*, Berkeley: University of California Press.（後藤将之訳，2016,『アート・ワールド』慶應義塾大学出版.）

Bergström, Lina, and Maarten van Ham, 2010, “Understanding Neighbourhood Effects: Selection Bias and Residential Mobility,” *IZA Discussion Paper* 5193.

Bottero, Wendy and Crossley Nick, 2011, “Worlds, Fields and Networks: Becker,Bourdieu and the Structures of Social Relations,” *Cultural Sociology*, 5(1):99-119.

Cressey, Paul G., 1932, *The Taxi-Dance Hall: A Sociological Study in Commercialized Recreation and City Life*, University of Chicago Press.（桑原司ほか訳，2017,『タクシーダンス・ホール——商業的娯楽と都市生活に関する社会学的研究』ハーベスト社.）

Clarke, Adele E., 2003, “Situational Analysis: Grounded Theory Mapping After the Postmodern Turn,” *Symbolic Interaction*, 26 (4): 553 – 76.

Clarke, Adele E. and Joan Fujimura, 1992, “Introduction: What Tools? Which Jobs? Why Right?,” A. E. Clarke & J. Fujimura (eds), *The Right Tools for the Job: At Work in Twentieth Century Life Sciences*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 3 – 44.

Clarke Adele E. and Star Susan L., 2008, “The Social Worlds Framework: A Theory/Methods Package,” Edward Hackett, Olga Amsterdamska, Michael Lynch, and Judy Wacjman eds., *Handbook of Science and Technology Studies*, Cambridge:MIT Press, 113-37.

Coleman, James S., 1980, “Paul F. Lazarsfeld: The Substance and Style of His Work,” Robert K. Merton and Matilda White Riley eds., *Sociological Traditions from Generation to Generation: Glimpses of the American Experience*, Norwood: Ablex Publishing.

Elwert, Felix, and Christopher Winship, 2014, “Endogenous Selection Bias: The Problem of Conditioning on a Collider Variable,” *Annual Review of Sociology* 40:31-53.

Fischer, Claude S., 1984, *The Urban Experience*,2nd ed. New York:Harcourt Brace and Jovanovich.（松本康訳，1996,『都市的経験——都市生活の社会心理学』未來社.）

原田謙，2016,「社会学の系譜から地域の文脈効果を再考する——集合的効力感に着目したソーシャル・キャピタル研究」『老年社会科学』37(4): 447-55.

宝月誠，2005,「序説——社会的世界とコントロール」宝月誠・進藤雄三編,2005『社会的コントロールの現在——新たな社会的世界の構築を目指して』世界思想社.

————，2010,「シカゴ学派社会学の理論的視点」『立命館産業社会論集』45(4) : 45-65

————，2021,『シカゴ学派社会学の可能性——社会的世界論の視点と方法』東信堂.

Kacperczyk, Anna, 2019, “Between Individual and Collective Actions: The Introduction of Innovations in The Social World of Climbing,” *Qualitative Sociology Review*, 15(2):106-31.

片桐雅隆，1981,「多元的現実と社会的世界論」『ソシオロジ』25(3):34-51.

Lahire, Bernard, 2012, Monde pluriel : penser l’unité des sciences sociales, Seuil.（村井重樹訳，2016,『複数的世界——社会諸科学の統一性に関する考察』青弓社.）

Lazarsfeld, Paul F., and Herbert Menzel, 1961, “On the Relation between Individual and Collective Properties,” Amitai Etzioni ed., *Complex Organizations*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 422-40.

Levy, Brian L., Nolan E. Phillips, and Robert J. Sampson, 2020, “Triple Disadvantage: Neighborhood Networks of Everyday Urban Mobility and Violence in U.S. Cities,” *American Sociological Review*, 85 (6): 925-56.

Levy, Brian L., Ann Owens, and Robert J. Sampson, 2019, “The Varying Effects of Neighborhood Disadvantage on College Graduation: Moderating and Mediating Mechanisms,” *Sociology of Education*, 92 (3): 269-92.

MacLean, Sarah, Dwyer Robyn, Amy Pennay, Michael Savic, Claire Wilkinson, Steven Roberts, Karen Turner, Emma Saleeba and Robin Room, 2021, “The ’Social Worlds’ Concept: a Useful Tool For Public Health-oriented Studies of Drinking Cultures,” *Addiction Research & Theory*, 29(3):231-38.

松本康，2003,「都市社会学の遷移と伝統」『日本都市社会学会年報』21:63-79.

————，2021,『「シカゴ学派」の社会学——都市研究と社会理論』有斐閣.

西澤晃彦，1996,「『地域』という神話——都市社会学者は何を見ないのか ?」『社会学評論』47(1): 47-62.

大西貢司，1988,「A. ストラウスの「社会的世界」論に関する一考察——シンボリック・インタラクショニズムにおけるシカゴ学派の伝統の連続性／不連続性」『年報社会学論集』1:13-22.

Raudenbush, Stephen W., and Robert J. Sampson, 1999, “Ecometrics: Toward a Science of Assessing Ecological Settings, with Application to the Systematic Social Observation of Neighborhoods,”

Sociological Methodology, 29(1):1-41.

Robinson, Richard, Ian Patterson, and Megan Axelsen, 2014, “The "Loneliness of the Long - Distance Runner" No More: Marathons and Social Worlds”, *Journal of Leisure Research*, 46(4) :375-94.

Sampson, Robert J., 2008, “Collective Efficacy Theory: Lessons Learned and Directions for Future Inquiry,” Francis T. Cullen, John Paul Wright and, Kristie R. Blevins eds., *Taking Stock: The Status of Criminological Theory*, New Jersey: Transaction Publishers.

————, 2010, “Eliding the Theory/Research and Basic/Applied Divides,” Craig Calhoun ed., *Robert K. Merton: Sociology of Science and Sociology as Science*, New York: Columbia University Press, 63-78.

————, 2012, *Great American City: Chicago and the Enduring Neighborhood Effect*, Chicago: The University of Chicago Press.

Sampson, Robert J. and W. Byron Groves, 1989, “Community Structure and Crime: Testing Social-Disorganization Theory,” *American Journal of Sociology*, 94(4), 774-802.

Sampson, Robert J., Jeffrey D. Morenoff, and Thomas Gannon-Rowley, 2002, “Assessing ‘Neighborhood Effects’: Social Processes and New Directions in Research,” *Annual Review of Sociology*, 28: 443-78.

Sampson, Robert J., Stephen W. Raudenbush, and Felton Earls, 1997, “Neighborhoods and Violent Crime: A Multilevel Study of Collective Efficacy Science,” *New Series*, 277, issue 5328: 918-24.

Sampson, Robert J., Patrick Sharkey, and Stephen W. Raudenbush, 2008, “Durable Effects of Concentrated Disadvantage on Verbal Ability Among African-American Children,” *Proceedings of the National Academy of Sciences*,105:845-52.

Sharkey, Patrick, and Jacob W. Faber, 2014, “Where, When, Why, and For Whom Do Residential Contexts Matter? : Moving Away from the Dichotomous Understanding of Neighborhood Effects,” *Annual Review of Sociology*, 40: 559-79.

Shibutani, Tamotsu, 1955, “Reference Groups as Perspectives,” *American Journal of Sociology*, 60(6):562-569.

Small, Mario L., and Jessica Feldman, 2012, “Ethnographic Evidence, Heterogeneity, and Neighbourhood Effects after Moving to Opportunity,” van Ham, Maarten., David Manley, Nick Bailey, Ludi Simpson, and Duncan Maclennan eds., *Neighbourhood Effects Research: New Perspectives*, Netherlands: Springer, 57-72.

Small, Mario L., Robert A. Manduca and William R. Johnston, 2018, “Ethnography, Neighborhood Effects, and the Rising Heterogeneity of Poor Neighborhoods across Cities,” *City & Community*, 17(3): 565-89.

Strauss, Anselm L., 1978, “A Social World Perspective,” *Studies in Symbolic Interaction*, 1:119-128.

祐成保志，2014,「訳者解説——ハウジングの社会学・小史」ジム・ケメニー (祐成保志訳)

『ハウジングと福祉国家　居住空間の社会的構築』新曜社.
筒井淳也，2016,「因果推論の限界についての社会学的検討」平子友長等編『危機に対峙する思考』梓出版社.
Unruh, David R., 1980, “The Nature of Social Worlds,” *The Pacific Sociological Review*, 23(3):271-96.
Wilson, William J., 1987, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*, Chicago: University of Chicago Press.（＝ 1999，青木秀男監訳『アメリカのアンダークラス　本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店.）
Zorbaugh, Harvey W., 1929, *The Gold Coast and the Slum*, Chicago: University of Chicago Press.（＝ 1997，吉原直樹訳『ゴールドコーストとスラム』ハーベスト社.）

（せき　しゅんぺい、慶應義塾大学大学院社会学研究科、s.seki0403@gmail.com）
（おおわ　ふゆき、東京大学大学院人文社会系研究科・大阪市立大学都市文化研究センター・日本学術振興会特別研究員、fuyuki.owa@gmail.com）
（みやち　しゅんすけ、東京大学大学院学際情報学府、miyachi-shunsuke314@g.ecc.u-tokyo.ac.jp）
（査読者　玉野和志、中筋直哉）